

台湾の日本研究：日本文学研究を中心として

著者	林 文月
雑誌名	日本研究：国際日本文化研究センター紀要
巻	10
ページ	31-38
発行年	1994-08-31
URL	http://doi.org/10.15055/00000842

3 台湾の日本研究

——日本文学研究を中心として

林 文月（台湾大学）

先ず、一言お断りして置きますが、台湾における日本研究は、皆様の予想外に貧弱なものでありまして、私は誇らかにここに立ってお話することが出来ないのが残念ですが、事実を事実として注目し、そしてこれをきっかけに深く反省してみるのも、あるいは今後私達の日本研究への再出発の一つのチャンスになるのではないかと存じます。

周知の如く、台湾は日清戦争敗戦後、下関条約により日本の領土となり、第二次世界大戦が終わるまで、50年もの長い月日を、法律上、台湾人は日本国民として生活をしていました。ことに都会に住む台湾人は、日常日本語を話し、日本文を読み書きしていましたので、今日に至っても、50代以上の台湾人は、たいてい流暢な日本語を話すことが出来、中には普通の会話に日本語を入れなければ十分に意味を表すことが出来ない人さえもいます。また読書は勿論、手紙も日本文で書いた方が便利だという人もたくさんいます。台湾大学（即ち1928年、日本人によって創立された台北帝国大学）の図書館内には、植民地時代より残っている日本書籍がかなりあり、中には現在日本では見られない善本さえ保存されています。このように日本研究を発展させるのに有利な条件をもつ所は、およそ世界に二つとないといっても大袈裟ではないでしょう。けれども、台湾における日本研究は貧しいのです。これには、少なくとも2つの原因があると私は思います。

その一つは、少々時間的に遡りますが、つまり、台湾人は植民地時代、日本語を話し、日本文を読み書きしてはいましたが、教育の分野においては、文科や法政科等、人文思想の高い訓練を受けることを制限されていました。これは日本人による植民地人民に対する一種の政治の面からの予防と配慮であったと思われます。そのため、当時地位と教養の高い台湾人家庭では、子孫を医者に育て上げることを最高の誇りに思っていました。医者は社会的に地位が高く、人々に尊敬され、また高収入を得られる職業だったからです。この気風は、今日に至ってもまだ残り、医学生は大学受験生のトップの目標になって、何回も試験を受ける学生が少なくないのです。

もう一つの原因は、終戦後、急にまた中国人に戻った台湾人が、今度は新しい国語——北京語を一生懸命習わなければならず、国民政府は北京語を一日も早く普及させるため（また、当時反日意識が残っていたのも事実ですが）日本語と日本の歌を全面的に禁止しました。そのお蔭で、台湾人は短期間の内に中国語文を覚え、若い世代は勿論、戦前日本教育を受けた中年以上の人々さえも、北京語を話し、中国文で読み書きが出来るようになりました。

しかし、8年間にわたる日中戦争は、中国人民の心の底に深い痛手を残し、日本に対する敵意は、たやすく払い除けられるものではありませんでした。その上、中国人はずっと昔より、日本を単なる東の海上に存在する夷と見ていました——これは『三国志』以降の各朝代の史籍に載せられている記事を見れば分かります——それ故、日本の文化をも長い間無視して来ました。このような偏見は、日清戦争の敗北によって目覚め、改めて現実に対面するようになり、また20世紀以降の日本留学ブームによって、魯迅、周作人や錢稻孫等、多くの留學生の翻訳や紹介を通して、本当の日本の姿が中国人の目の前に現れたのです。しかし、日本文化に対する関心は、依然としてごく少数の人達の間だけに止まり、政府も大衆も無関心でした。

台湾が前に申しましたように、世界のどの国よりも日本研究を進めるのに良い基礎をもちながら、つい目覚ましい成果が見られなかったのは、以上のような歴史的、政治的現実と相絡まった複雑な原因が存在していたからです。では、このようなバックグラウンドをもつ台湾における日本研究はどのような現状であるか、以下、私は2つの方向に分けてお話をしたいと思います。

先ず、教育があつて研究があり得るものですから、現在の台湾における大学の日本語文教育を簡単にご紹介いたしましょう。

前にも述べましたように、終戦後、国民政府はもっぱら台湾人の北京語と中国文の能力を引き上げるため、その上、反日情緒が多く的大陸系中国人の心に深く潜んでいたため、日本語と日本の歌を禁止しました。そのような状況の下に、大学教育の課程に日本研究に関するものが見られなかったのは、当然のことでした。ただ、台湾大学文学部の外国語学科には、日本語の科目が、第二外国語（第一外国語は英語）として、フランス語、ドイツ語、スペイン語等と共に設けられていましたが、独立した学科としてでなく、言語訓練の段階に止まっていました。初めの頃は、「日文一」「日文二」と、2学科にわたる課程を、外国語学科の学生に限らず、校内に広く、各学科の学生達のために設置されていましたが、その後、20年ほど前、「日文三」の課程が増設され、現代文の「文学作品名著選読」として、日本語文の基礎をもつ学生のために、普通会話より、文学の分野に進む試みが見られます。台湾大学では、博士コースを修了するには、第二外国語をパスしなければなりません（私の指導する学生達には、一応日本語で漢文学に関する論文が読めるよう、たいいてい日本語文の単位を取るようにと勧めています）。このように、台湾大学では、日本語文が未だ独立した学科になっていませんので、教師は言語研究者が多数を占めていますが、中には個人的に和歌、『方丈記』を専攻する翁蘇倩卿先生、五山文学、日中比較文学を研究する陳明玉先生、また若い世代の趙姫玉さんも比較文学方向に力をそそいでいます。

独立した日本語学科は、1963年、文化大学に日本語学科が設けられるようになり、その後、3年ごとに1つの大学に増設されるようになりました。つまり、1966年に淡江大学、1969年に輔仁大学、1971年に東呉大学と、相次いで新しく日本語文教育は、終戦後約20年のタブーを破ってようやく教育部（文部省）に認められるようになったのですが、惜しいこと

に、1972年の国交断絶のため、再び途絶えてしまい、18年後の1989年、やっと政治大学東方語文科の中に日文組が設けられました。

これら、日本語学科のある大学は、政治大学を除くほか、4校共に私立大学であります。初めの頃、4校は教育部の学科規定に制限され、会話や普通の読み書き訓練など、実用方面に重点を置いていたようですが、近年来、各校をリードする学部副主任、あるいはその後に増設された大学院の所長個人の専攻、またその他の配慮により、徐々に各自独特の発展が目立って来るようになり、文化大学の日本研究所は、経済や政治、いわゆる日本学を重んじている趣が見られ、講座も必ずしも日本語を使用することに限られず、卒業論文も中国文で書いても差し支えないようになっています。文化大学発行の『中日文化』という機関誌は、戦後初めて日本語で発表されたものだけに、意義深いものです。

淡江大学も、文化大学と類似したような所がありますが、現在の学部主任林丕雄氏は、石川啄木を研究していて、1989年、岩手日報の「啄木文学賞」を受賞された学者です。林氏は目下淡江大学の日本文学発展を促すことに没頭する一方、また今年の11月に当校で「国際啄木討論会議」を開催する準備を進めています。これは台湾における初めての日本文学に関する国際討論会となり、非常に大切なスタートになることと思います。

輔仁大学は、カトリック系の大学で、日本語学科創立間もなく、日本人のシスター山崎陽子先生が長年学部の主任を担当していましたが、2年前より当校卒業の林水福氏が日本留学後、母校へ戻り、主任を継ぎました。氏は古典文学を学部の必修課目に決め、他校にない厳しい例をつくり上げました。また、同じく当校卒業の楊承淑氏も、日本留学修士獲得後、母校に戻り、1987年再び東京のISSで「逐次通訳」と「同時通訳」をマスターし、母校と東呉大学の大学院で通訳を教えています。

林氏と楊氏の如く若い世代が今日の学界で日本語文教育のバトンを受けついでいることは、台湾の日本研究に新しい希望を齎すことと、私は思います。何故なら、彼等は大陸系、台湾本土を問わず、大戦後台湾で成長し、彼等の先輩のような日本に対する複雑な心理的負担がなく、日本文化を単純に一つの外国文化として対面し、受け入れることが出来るからです。

輔仁大学には、現在まだ大学院がありませんが、学風の伝統が厳しく、機関誌『日本語日本文学研究』が毎年1冊発行され、内容は語学研究と文学研究の両方を兼ねています。また、他校に比べて国際学会が頻繁で、1986年、「宗教と文学」の討論会が催された時は、日本からも作家の遠藤周作、梅光大学学長佐藤泰正や武田友寿の諸氏が出席しました。中でも遠藤氏は、台湾大学外国語学科で米国文学を専攻し、また作家でもある王文興氏と通訳を通して対談しました。1989年11月には、また当校で2日間にわたる「日本文学と語学」のシンポジウムが開催され、日本から今井源衛、仁平道明、加藤正信、駒井明、渡辺憲司、佐藤泰正の諸氏が出席し、古典や近代文学と語学などについて、熱烈な討論が行われ、その論文は去年4月刊行の『日本語日本文学研究』第16輯に発表されています。

東呉大学は、他校と少々趣を異にし、日本語教育を特に重んじています。これは当校が長年語学を専攻される蔡茂豊氏のリードの下にあるからだと思いますが、日本語学科をもつ以

上の各大学の中でも、東呉大学は今年より博士コースを創立することになっています。蔡氏が特に日本語教育に重点を置いている苦心は、その厳格な訓練により、台湾本土の教師を育て上げたい意欲があるからです。大学で教師となり、プロモートが出来るには、学位がなければなりません。今までの学界では、日本人教師と数少ない中国人（年輩の台湾人と、ごく少数の日本語に通じた大陸系中国人）に限られていましたが、年ごとに増加する学生のため、教師の養成が必要となり、また優秀な学生が誰も彼も日本へ留学することは不可能ですので、このような発想があったものと思います。勿論、語学のみならず、古典文学、近代文学、比較文学等、幅広いカリキュラムが、次のバトンを渡される若い教師達のために設置されています。

なお、東呉大学では、夏休みと冬休みを除き、月に1回の日本語研究会があり、教師達が集まって、講演や討論をしています。機関誌『東呉日本語教育』は、その名称から見て分かるように、日本語教育を中心としたもので、学科発展の方針が明らかに現れています。

政治大学東方語文学科に附設されている日文館は、創立してまだ2年足らずの若さで、まだはっきりした方針が見られませんが、元来、政治大学は行政や外交の人材を育てるための大学であるのと、また既に存在する他の外国文組の発展ぶりとを照らし合わせてみると、あるいは将来そのような実用的な方向に進むのではないかと思います。

このほか、台中にある国立台中商業專科学校に、1980年応用言語学科日本語専攻が設置されました。ここは専ら国際貿易の人材養成が目標で、機関誌『外国学報』は、実用向きの内容が多数を占めているのも当然です。

なお、台湾の各大学や專科学校で日本学に関する学者と、日台学術文化交流に関心をもつ人達の発案によって、1979年、「中華民國日本研究学会」が台北市で創立され、日本学をいろいろな方面より手広く研究しています。これにも機関誌『日本学報』があり、研究紀要を毎年刊行しています。これと類似していて、専門に日本語文教育をテーマに討論や講演発表をする各大学の日本語文教師達の集まり——「台湾日本語文研究会」が1989年に創立され、来る3月で満2年を迎えます。月に1回の集まりで、学校を越えた広い視野の下に、各々自分の経験や意見を述べたり、また特別講演もある意義深い新しい組織です。

以上、現在台湾各大学における日本語学科を通して、日本語文研究を紹介しましたが、このほか、歴史科の中にも、日本史、日中関係史、近代日中関係史等の学科を設置している大学が数少ないながら、何か所かあります。ことに現在台湾大学で日本史の講座を担当する李永熾氏は、早くより日本の歴史と文学を通して日本を理解することに注目し、専門の研究以外に、史籍や文学作品の翻訳を多数出版しています。

今日に至って台湾の中央研究院（ACADEMIA SINICA）にはまだ独立した日本研究所がありません（欧米研究所はあります）。ただ、そのうち近代史研究所の林明德氏が日本史、黃自進氏が日中外交史、黃福辰氏が中国における日本人の文化産業など、各々研究に没頭しています。経済研究所には、黃安瑛さんが日中貿易関係方面について研究をしています。学界の最高機関におけるこのような現象は、政府が日本研究について甚だ無関心であることを示しています。別に、中華經濟研究院にも類似したような内容を（例えば日本に対する貿易

の逆差問題) 研究している学者がいますが、いずれも独立した規模がまだありません。これはたいへん遺憾なことですが、事実でありますので、ありのままをお話した次第です。

次は出版界における日本関係の書籍をご紹介致しましょう。前に申しましたように、各大学や研究機関には、それぞれ日本語文や、日本研究の論文が載せられていますが、それは一般の書店にはほとんど見られません。また、大学院の修士論文、及び教師の資格認定と昇格の際に提出される論文も少なくないはずですが、大部分が校内の図書館に眠っていて、単行本として出版されているものは非常に少ないのです。それは読者が少なく、出版してくれる所が少ないからです。日本語学科の学生達のテキストになるような会話や文法類の書籍が本屋にずらりと並んでいるばかりで、同じ文法に関する本でも、深い理論の方は、著者が自費で出版するほかは、到底大衆に見られるチャンスがないと言えます。

蔡華山氏が東呉大学で講義をした資料をまとめた『日本文学史』は売り切れたのか、現在の書店には見当たりません。別に劉崇稜氏の『日本文学概論』(1972年)が、やはり学生の必要に応じて再刊されています。文学類に比べますと、歴史類は意外と多いようで、『日本史』だけでも、余又堯(1956年)、李永熾(1975年)、鄭学稼(1977年)諸氏の3冊が見られ、また、徐先堯氏の『日本近代史』、陶振蒼氏の『日本史綱』、林明德氏の『近代中日関係史』等があります。李永熾氏は日本文からの翻訳で、『日本近代国家の形成』と『歴史と思想』を出版しており、陳鵬仁氏訳の『中日関係』も見られます。なお、近年来、民間に仏教の信仰が急激に広まり、『日本禅僧』『天台大師』『浄土本願問答録』等の翻訳が書店の日本関係類の一角にあるのも面白い現象です。

私自身は中国文学を専攻する者で、日本へ来るたびに、東京の東方書店、内山書店には必ず漢文学に関する著作を買いに行きます(京都の魯文堂や、朋友書店等も同様ですが)。そこには日本の学者が書いた中国研究の本が数え切れないほど、ぎっしり並んでいるのですが、それに比べると、本当に中国人の日本研究は貧弱なものです。

翻訳を研究の範囲に入れるか否かは、人によって異なった意見があるようですが、文学を通して外国の文化、歴史、社会、あるいはその国の人達の考え方等を認識するのに大切な役目をもつものと思いますので、現在台湾における日本文学の翻訳について少しお話をいたします。

終戦後、一時禁止されていた日本語の使用は、台湾と日本の経済関係が頻繁になるにつれて、段々と日本語をビジネス、または旅行等の上で使用するチャンスが多くなり、必要に応じて民間いたる所で個人的な日本語教室が出来るようになり、また、必要に応じて、簡単なビジネス方面の日文書籍が何時の間にか翻訳され、出版されるようになりました。それに引き続き、文学類の作品も、徐々に翻訳され、大学における日本語学科の設置より前に、雑誌や新聞に載せられ、読者に歓迎されていました。中年以上の台湾人は、だいたい日本文学を原文で読めますが、大陸系の中国人と若い世代の台湾人は、翻訳に頼らなければ日本文学に接触することが出来ません。

最初に日本文学を大衆の前に紹介した翻訳者は、たいてい中年の台湾人で、戦後苦労して

北京語を習い、中国文を学んだ人達でした。その中には、昔自らが日本文で文章を書いていた作家も少なくありません。例えば楊逵、黃得時、葉石濤、鍾肇政諸氏です。また、中には家庭の主婦が趣味でアルバイトとして筆をとった例もあります。当時の劉慕沙、朱佩蘭、嶺月等は、未だにその方面で活躍しています。

時は流れ、次第に大学で日本語教育を受けた第2世代の者も加わり、現在台湾の翻訳界では、日本語翻訳者の人数は、英語翻訳者に匹敵し得、否、それ以上的人数になったかも知れません（原因は、年輩の台湾人が必ずしも英語に堪能であるかは疑わしいからです）。

しかし、民主社会において、文学の発展は完全に自由で、個人的なことであり、文学作品もその点、ともすれば読者、マスコミ、またはマーケットに左右されがちで、現在市場の様子をざっと見れば、日本文学の翻訳は他国文学に比べれば数は少ないのですが、大衆向きのものが多く、本当の良い本の翻訳はかえって少ないようです。なお、翻訳者も、出版者も、一定したプランに欠けていて、往々にしてマスコミの造り上げるブームに影響されがちで、時には皆こぞって同じ本を取り上げたりして、読者を困らせています。例えば川端康成がノーベル賞を受賞した時、同時に『雪国』『千羽鶴』『古都』の訳本が3種も4種も出版されました。時を急ぐため、翻訳の質も当然疑わしいものです。また、三島由紀夫の自殺事件が新聞に掲げられた時も、『金閣寺』等の訳本が急にあちこちの書店のベストセラーの注目点となりました。谷崎潤一郎の『細雪』が映画化され上映された時や、松本清張の推理小説が貸しビデオで見られるようになった時も、同じ状況でした。このような場合、粗製乱造を免れないのは、当然のことで、これは作者に対し、また読者に対しても、非常に失礼なことだと思います。

現在、台湾における日本書籍の翻訳は、近代小説に注目を集中し過ぎ、詩、随筆や評論等は、ほとんど見られません。中でも、夏目漱石、芥川龍之介、安部公房、川端康成、三島由紀夫、井上靖、遠藤周作等の作品が主な対象になっており、女流作家の中では、三浦綾子、曾野綾子、佐藤愛子等がトップを切っていますが、いずれも全面的な紹介の意欲が見られず、若干の短篇を集めたものが多いようです。

一つ注目に値する現象は、久大文化出版社が「日本文庫」のシリーズを1989年より発刊し、約30冊の近代小説家の作品が翻訳されています。このシリーズの特色は、前に訳者の序文と日本文学に詳しい学者の解説があり、後には作家の年表が附録になっていて、読者の鑑賞と認識を導く、教育的な面で、意義深いと思います。また、光復書局の「当代世界小説家読本」シリーズの中に、日本の近代小説が10冊あり、久大のと類似したような編輯の趣が見られます。もう一つ、远流出版社は、もっと視野を広げ、日本文学研究者の林水福氏に依頼し、近代小説100冊の翻訳を計画し、目下8冊だけが完訳されています。しかし、出版社内部の事情で、暫く中止状態になっているのが、たいへん遺憾であります。

以上述べました情況は、全部近代小説に止まっていることに皆様お気づきのことかと思いますが、実は古典文学の方は、もっと乏しいもので、強いて申せば、私が1978年に完訳した『源氏物語』と、1989年の『枕草子』のほか、李永熾氏が1988年、『徒然草』、同年『好色五人女』を完訳し出版しているだけです。李氏は別に『好色一代男』をも完訳しましたが、ま

だ出版されていません。皮肉なことに、李氏も、私も、日本文学の研究者ではありません。李氏は台湾大学で日本史の講座をもち、文学と歴史のつながりを探究するため、熱心にいろいろと日本の文学作品を翻訳なさっていますが、私は20年前、日中比較文学の研究がきっかけになって、『源氏物語』の中国文訳に打ち込んだのです。なお、東呉大学の薛柏谷氏が俳句の翻訳を時々新聞に載せているのが見られますが、まとまった本が出版されるのは、何時のことか分かりません。

文芸評論の方は、もっと寂しいありさまで、長年、厨川白村の著作が、何度か繰り返し翻訳され、時には作者の紹介が付け加えられているだけです。

少し話題が離れますが、台湾には日本書籍販売の専門店がかなりあります。これは日本本土を除いてほかに余り見られない不思議な現象かと思います。台北の本の街——重慶南路には昔からの伝統をもつ鴻儒堂と文士書店があり、日本語学科の学生や、年輩の日本人に親しみをもつ台湾人のために、いろいろと教科書や他の書籍が用意されています。十数年前、邱永漢氏の資本による永漢国際書店が堂々と台北の目ぬき通り——中山北路と忠孝東路に開かれ、たくさんの日本文書籍や雑誌を直接輸入しています。そして、台北より南の方へと、6か所のチェーンストアを増設しています。3年前に、紀伊國屋書店も、同じく忠孝東路にある日中共営のデパートSOGOの中にひとコーナーを設け、その後間もなく、日本人居住者の多い地区、台北郊外の天母にも、また1か所のチェーンストアが開かれました。台湾に住む日本人は1万人を超えません。これらの書店に入るお客さんは、実際、大多数が中国の読者です。永漢書店も、紀伊國屋も、たいへん規模の大きい本屋ですが、本棚に並ぶ書籍を見れば、大衆向きのものが多く、娯楽、スポーツ、旅行、婦人雑誌やコミック等が一番人気をよんで、次にはコンピュータ、ビジネス、医学、家庭的、実用的なものが目立ちます。文学類の本は、そのただ一角にあるばかり、それも全部大衆小説、近代小説ばかりで、古典文学は全く見られません。店長さんに尋ねましたところ、「買い手がないから」と返事されました。なるほど、本屋は図書館と違って、買う人のためにあるものですから、仕方ありませんが、大衆が功利に走り、経済が成長する一方、人間の素質が平凡化する悲しさは、東と西を問わず、世界中同じなのではないでしょうか。

話が十分長くなり、愚痴っぽくなって申し訳ございません。以下、私なりの結論を申しあげたいと思います。

最初より、私は批判的な口振りをもって話を進めて来ましたが、それは、台湾が日本研究に有利な基礎をもっていながら、長年政治やその他の原因のため、今日に至ってまだ著しい成果を上げていないことと、また日本における中国研究に比べると、私達は遥かに劣っているからです。

けれども、私は悲観的ではありません。何故なら、日本の中国研究が千年もの歴史をもつのに比べて、台湾における日本研究は、実際ごく短い20—30年前より再出発をしたからです。現在限りある大学内で努力されている結果は、将来時期が来れば、立派に花咲くものと思います。また、政府が経済に一生懸命力を尽くす一方、もう少し教育の視野を広げてくれ

れば、幸いだと思います。楽観的な目で見ますと、それが少しずつ芽生えて来たようで、ちょうど私がここへ来る直前、1月11日に、中華民国政府の行政院文化建設委員会は、日本交流協会の協力の下に、文化講演を開催しました。日本から森啓、日下公人、中村規の諸氏が、それぞれ「行政の文化化」「日本の生活文化産業の発展」「東京文化概説」等をテーマに講演されました。日本と台湾の間にこのような意義深い文化の交流が、今後も途絶えずに積極的につづけられれば、必ずや台湾の日本研究は目覚ましい発展を見せることでしょう。